

いい先生になりましょう！

．．．．．若い先生たちへのアドバイス：**その3** 初心忘るべからず

2020、3、25



☆あなたが教師になろうと思ったのは、いつですか？

☆教師になろうと思ったのは、どうしてですか？

- A：安定している職業だから
- B：憧れている先生のイメージがあったから
- C：他に特に、希望する職業が無かったから
- D：その他

◆くわしい理由があればどうぞ～

きっと、自分がどんなことを考えて、先生になったか……それを話したら、みなさん、止まらないでしょう。一人一人に動機や理由があり、なるための努力があり、なってからの歴史もそれぞれにあるでしょう。ほんとうは、これだけで語りつくしてもいいと思います。しばらく意見交換してみましょう。

そのあとで、こちらに進んでみてはいかがでしょうか？

★いい先生とは、どんなイメージでしょうか？

先生という、どんなイメージを持っていますか？

1 ページに載せたように、ドラマのイメージもたくさん持っていることでしょう。

ごくせんの「ヤンクミ」と言われた女の先生、3 年 B 組のずっと担任だった金八先生、GTO の鬼塚先生、ルーキーズの川藤先生……

前ページの一番左の上の先生はわかりますか？ 『二十四の瞳』の大石先生です。

戦争前に小豆島に赴任した女先生、子どもたちから好かれて、でも怪我をしてしまう……心配した子どもたちは、先生の家までお見舞いに歩いて 1 日かけて出かける……泣きながらたどり着いた子たち……しかし数年後の同窓会では、戦争で亡くなったりけがをしたり……の同級生、静かに戦争の悲しさを訴える壺井栄原作の映画です。

この若い女先生の優しさは、永遠のモデルです。

そして、一番最近中学生がハマったのが、ドラマの「三年 A 組」、前頁右下の写真が柊先生。テーマはいじめ。それぞれの世代に共通するのは、どの先生も熱血で、正義感、そして真が優しい先生。

そういうドラマは、とても人気が出ます。

あなたは、いい先生とは、どんな先生だと思いますか？

- ・子どもたちから人気があつて、好かれている。
 - ・子どもたちから信頼されている。
 - ・保護者たちからも、頼りにされ、好かれている。
 - ・教室では、子どもたちが、ハイハイと手を挙げ、先生が、何かやろうとすると、みんなで盛り上がり、子どもたちがどんどんいろいろ始めて、とても楽しいクラス。
 - ・外に散歩に行ったりしたら、みんなついてくる。はいはい先生とまわりつかれて、とても大変。
 - ・部活では、一致団結して、次々と勝利をおさめ、チームの心が一つになり涙と汗のチーム作り。
- そんなイメージではありませんか。きっと就職前は、そうしたイメージを持って、楽しい学校、楽しい教室、充実した毎日……を思い描いていたでしょう？



しかし、今は、どうでしょうか？ イメージ通りに行っていますか？

最初に教師になる前にイメージしていた「先生像」は、どこかに置き忘れていないでしょうか。

学校社会のあつれきに、押しつぶされていたり、あきらめていたり、こういうものなんだと、自分自身を納得させていませんか。

その原因を少しでも、分析し、わかるようにして、

がんばろうと、明日を迎えられるように……その手助けをしたいと思います。

ちなみに、私が教師になろうと思ったのは、大学 3 年生から。

理由は雑誌「ひと」に出会い、おもしろい授業をすると、勉強がわかると知ったから……その授業のおもしろさが唯一無二でした。仮説実験授業や水道方式の算数です。



★先生になる前に、知らなかったこと。

なぜ、今、あなたが元気が無くなってしまったのか？

一生懸命教師になってがんばろうと思っていたのに、ちょっとくじけた気持ちでいるのは、原因は三つくらいあります。

1、「学校には、大人の“学校組織”という社会があって、その社会は独特な社会だということ」

教師になりたいと思う若い先生たちは、学校という社会を、子どもたちの時に経験しているので、学校のことはよく知っているつもりでいます。

しかし、学校には、子どもとして生活している場と、先生として仕事をしている場が、厳然として二つあり、先生は、その大人としての社会の面で、仕事をする……そういうしくみになっているのです。当然ですね。でも、学校という教師の仕事の場所、それは、独特だと思います。いろいろな特性があります。

これは、一般企業でも同じ。その職種ごとに、特性ある社会であり、独特なルールや習慣があるのは、良くも悪くも当然だと言えます。

例えば、企業であれば、いくら人間性に優れていても、営業成績を全くあげられなかったり、新製品を全く開発できない研究員は、評価が低くなります。営利という企業の目的が、まず第一に優先されるのは、一般常識でしょう。

それと同様、学校では、子どもを育てることが第一の目的ではありますが、……いろいろ独特な習慣やルールがあります。

その一つが、学校や学年の、団体としての帰属意識や統一性です。

クラスで子どもたちといい関係をまず作りたいとがんばろうとしても、学校としてのルール、学年としての規律などが優先される様子に、まず、がっかりしてしまう若い先生たちも多いことでしょう。

子どもたちとのコミュニケーションより、先輩の先生たちからの厳しい一言や忠告の方を、まず聞かなければいけないことに、血気盛んな先生は反発を感じるかもしれません。

でも、これは、一つの安全対策。若い頃は納得がいなくても、しばらくすると「ああ、子どもを自分一人で守ることはとてもできないし、大変なことなんだ」と気づくことでしょう。私なども、何度も失敗をして、一人で責任を負うには、重すぎることを痛感するようになりました。

子どもたち全体を見て、全員の安全を守ることは、先生になりたての若者には、とてもむずかしく危なっかしいことなのです。

例えば、私が4年目で小学1年生を担当した時、あまりにかわいらしくて、子どもたちを、ほとんど叱ることができませんでした。そうしたら、クラスのオルガンの上にのぼる子たちも出てきて……それでも、叱れません。「だめよ」そう言っても、1年生は全く聞きませんでした。私も本気で言っていなかったし、怖い顔ができなかったのが、当然でしょう。

ところが、遠足に行くための集会になって、初めて私は驚きました。



私のクラスの1年生たちが、並べずに体育館に寝そべっている……

これでは、遠足で行方不明の子どもたちが出ます。

自由がいいと思っていた私ですが、そのままでは、子どもたちの安全が保証できないことがよくわかり、その日から、大声を出して、叱るようになりました。

もう一つ、初めて先生になって驚くことは、学校としての組織の動き方でしょう。学生の時に予想をしていなかったことです。先生たち同士のコミュニケーションの取り方です。

普通の企業と違い、上下関係は、それほど強烈ではありません。そして、一つの授業やクラスについて、先生になった途端に任されるという独立性があります。ここは、すぐにやりがいを感じられるところです。

しかしその一方で、問題が起きた時の対処方法については、すべて任されているわけではありません。これがとまどうところです。起きた問題についても、ドラマのように、熱く語り、説得し解決して、子どもたちと一緒に自分も育っていく…それを期待して、先生になった人も多いでしょう。

ところが、思い描いていたことと違い、問題の解決を担当のあなた一人に任せてもらえない。どこで、子どもたちと情熱を持って会話やコミュニケーションを取ればいいのかと、不完全燃焼のように思う時もあるでしょう。

最近の学校では、一人で解決しようがんばろうとすると、逆に、校長さんや上の人たちから、叱られる場面も増えています。(これは、最近の状況では、すぐに問題が広がりやすいためのこれも安全策ですが…)

それだけではなく、決して表に出てきませんが、教師が「子どもたちに好かれたい」と思うのは、職業上の本性。

なので、嫉妬・焼きもちは、多少なりとも、教師間ではあるのです。(年齢や世代も超えて…)でも、それを、表に出すのは、下品だし、自分だけではなく、子どもたちと学年の先生たち全体が、好意を持ちあう関係の方がベストだと、ベテランの先生は考えて、バランスを図ります。

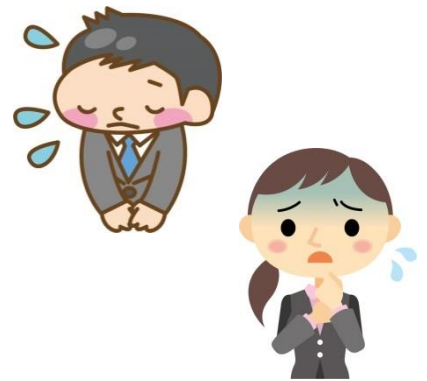
しかし、同年代の先生が学年で多かったり、自分だけが人気がある教師で十分と思っている先生が多いと、コミュニケーションがぎくしゃくし、まず、大人のコミュニケーションから破たんしていきます。同じ職場で、先生同士の競争があつたり、攻撃があつたり、足の引っ張り合いがあつたりすると、理想に燃えて就職した若い先生たちは、どれだけ、がっかりし、どれだけ毎日がつらくなるでしょう。



でも、コミュニケーションが、先生たちの間でうまくいく方法があります。それは、失敗を隠さないこと、苦勞していることも隠さないこと。でも、自分の弱みをさらすようで、なかなか最初は言えないと思います。言える範囲の失敗・苦勞でいいのです。その話をする事で、よいいな嫉妬や優越感無しに、共通の話題ができるようになります。試してみてください。

みんな、どんなベテランの先生たちだって、苦勞しています。新しい子どもたちとの出会いでは、今まで経験してないことが必ず出てくるくらい、子どもたちは千差万別。だから、共通の話題になるのです。あなたが苦勞していることを聞いてくれる先輩の先生は、あなたが子どもたちをかわいがっていることも、言葉の端ばしからきつと感じ取ってくれるでしょう。

本来、先生たちは、子どもたちを何とか幸せに育てようと、同じ様に、毎日苦勞している戦友同士なのです。苦勞していることや失敗の話をしながら、どれだけ、受け持っている子どもたちがかわいいか、そういう自慢話を、ちょこつとすれば、あなたの本心は必ず伝わります。



逆に、なかなかコミュニケーションがとりにくいのが、全部うまくいっていると豪語する先生です。必ず失敗はあるはずなのに、それを隠しているのは、逆にその先生が弱いせいでもあります。そして、見えていないのです。子どもたちがどんなにストレスを隠し、ほんとうの気持ちを言えずにいるのか……。

その先生たちも、いずれは苦勞をし、必ず學んでいくはずですから、心配しなくても大丈夫。

どんな先生たちをも育ててくれるのが、子どもたちなのです。

ですから、あなたは、子どもたちの話をたくさんして、聞いてくれる先輩に相談しましょう。道は開けるはずですよ。

二つめの知らなかったこと。それは、聞いたことがあったかもしれませんが、

2、おやごさんとの関係が、こんなにむずかしいとは、全然想像できなかった。

このことでしょう。

今、保護者の方たちから来る電話、手紙、注文、抗議・・・そうしたものは、ほんとうにさまざまです。

教師としての私たちには、予想すらできないほど、起きた問題によって保護者の考え方も、解決してほしい内容も方法も、多種多様です。

納得できないと、すぐに、校長先生へ、或いはすぐに教育委員会へ、そういう保護者の動きには、とまどいますし、何だか、強烈に不信感を抱かれ、信用されていないようで、教師の方も、とても傷つきます。

さらに、そういう問題が、すぐに解決せず長引いてしまうと、やがて心の病を引き起こしたり、先生の方が学校に行きたくなる・・・或いは休職、退職・・・という過程まで進んでしまう

ことも、時々あります。



今の時代、親の期待や要望にどう応えるか・・・これが、一番難しい問題になってきています。

それは、現場に立ってみなければ、予想できなかったことでしょう。

今、ベテランの私も、とまどったり、解決できなかったり、そういうことは、あります。

でも、私が心がけているのは、あきらめないこと、誠意を尽くすこと、よく寝ること、よく食べること、考えすぎないこと、これだけです。

結婚して子どもを育てて成人させた私が、保護者と向き合う時に考えることは、どの親御さんも、子どもへの自分なりの愛情を持っているからこそ、そういう態度や行動に出るのだと、理解することです。

これは、若い先生たちにとっては、一番難しいことでしょう。

保護者の方たちの言葉や行動が、裏にある愛情(その親御さんなりの独特の表現で)から来ていることをイメージしながら、理解する、・・・これは、子育てを体験しなければわからない・・・と言ってもいいくらいなので、ほんとうに困難。



でも、自分の立場からだけで考えない、これはできるのではないのでしょうか。

例えば、

忘れ物の多い子ども・・・手もかかって大変、面倒くさいし、なんで、基礎的生活習慣が身についてないの？



そう思うでしょうけれど、我が家の娘もそうでした。私が帰り着くと、娘はもう寝ていて、連絡帳を見ても、夜9時からでは、「墨汁売っていない、どうしよう・・・」

給食のエプロンも洗ってない・・・乾かない・・・どうしよう・・・

一人で子育てしているお母さんやお父さんは特別。働きながらも、懸命に子どもに恥はかせたくないと思っているのに、現実的に手が回らない・・・

そういう事情を察知し、少し他の子たちより、よけいに手をかけてあげる。

そして、忘れ物が多いことも、面談の際に追求せず、具体的にこういうことをやる予定だから前もってお願いします・・・これが、保護者との垣根を少し低くしてくれます。

いじめにあってる子ども・・・いじめにあってる子どもは、集団に入れない子ども。

教師の立場からすると、「変わっている」「面倒くさい」「大変」「自分で壁を乗り越えないとダメだ」「子どもなら、自然にいっしょに遊べるだろう」

そう思えるかもしれませんが、それは、あくまで教員の(はつきり言うと、未熟な)立場。

今の時代は違うのです。集団遊びが、小さい頃から無い時代。

いじめは、未熟な子どもたちの遊びの一種。(高校生でも)

それが証拠に、成熟した大人の間でいじめはあり得ません。

そして、いじめについては、親御さんも自分に刃を向けられたように感じるのです。

それは、親御さんの生活も反映しているから。

例えば、私の娘も小学校の時に、いじめではなくても、いじられているようでした。

それは、何より、学童保育から帰って一人の生活が長くて、一人で本を読んだりする生活が気楽だったから・・・。一人が好きで、かまわれなくなかったらしい。

集団で遊ぶ子は、もう、幼稚園のうちから集団で遊んでいて、お母さんたちも社交的で、いっしょに引き連れられていろんな経験をしています。

幼児からの経験が全くそれぞれ違い、兄弟もいなくて、葛藤もなく育っている子どもも増えています。

それなのに、いじめの原因として、「変わっているから～」と言われると、保護者は、自分の生活や子育てを責められているように感じます。



まず、いじめから自分の子をとにかく守りたいのに必死の保護者の方たちと、担任とでは、どうしても温度差が出てきて、逆に、担任は刃がこちらに向かってきたように感じてしまうのです。

でも、いじめの根本的な原因は違うのです。まだまだ未熟な子ども同士のコミュニケーション、相手を尊重する考え方を身に着けていないから。攻撃するのも、子どもたちにとっては遊びの一つ。

そんな遊びを身に着けたままでクラスが良くなるはずはありません。いじめられている子どもや親御さんは、相手に言わないで・・・ということもあるでしょう。でも、大丈夫と説得してください。そして、誰が誰に嫌な思いをさせているのか、クラスの前で、全体に話をするようにします。陰でやらないように、誰か見た人は担任に教えてくれるように。

そして、大人が教えるのだ、指導するのだという立場で、お母さんを安心させることが、一番大事です。そうしたら、保護者の方たちは、まず安心するでしょう。

最後にもう一つ。先生になって、予想外だったことは、・・・・・・或いは聞いてはいたけれど・・・

3.こんなに仕事の量が多いのか？ ブラック企業？ 朝から晩まで書類・パソコン仕事？

ではないでしょうか。

実際に、書類を作る量の多いこと、多いこと。

年間指導計画、週案、出席簿、テスト、採点、成績つけ、通知表、

指導案、研究授業、資料作成、校務分掌の仕事、

・・・・授業だけやって、子どもたちと遊んで、熱血指導をして、とはいかないのです。

部活指導、大会、練習試合、日程計画、表彰、

子どもたちの日記・作文・まとめ、そういうものにひとこと書いて、返してあげて、

評価もする。

各教科の評価、毎日の教材研究、プリント作成、プリント点検、ワーク点検、ノート点検・・・



これも、教育実習で、少しは洗礼を受けているものの、実際に現場に立った時に、何を優先的にやったらいいのか、その順番さえ、わからないことだらけで、落ち度があれば、子どもにも、周りの先生たちにも、何か言われる……。仕事ができる先生とも言われたのに、思うようにできない……。そういうジレンマで、週末の休みさえ学校に通い、平日は、夜 8 時、9 時まで仕事。そういう若い先生たちが、今、日本中にあふれています。(ベテラン教員が入れ替わる時期なのです)最初の理想やイメージ……そんなこと言ってもらえない毎日、これが現実だ、とほんとうのブラック企業として、働いている？ そう思えますね……。

最初の年には、果てしない仕事の山と子どもたち・親御さんとのむずかしい関係で、目の回る一年間だったでしょう。しかし、少しずつ、慣れていきます。例えば、ひと通りの仕事は、先生になって 3 年やれば、重要度の順番はつけられるようになります。6 年たてば、年間の行事や学校の動きも頭にすべて入ってくるでしょう。子どもたちの行動にも予測がつくようになり、問題の解決も、途方に暮れるだけではなくて、先回りして、少しは手をうてるようになるでしょう。

しかし、最初に、先生になりたかった理由、イメージはどうですか。どんどん離れていっているように、感じたりはしませんか。大丈夫ですか。そこで、初心に立ち戻って考えてみましょう。何が大事なのか、これからの先生の仕事を全うするまでに、見失わないことは何か、それが、きっと見えてくると思います。

★あなたが一番変わったのは、ここです。

さて、あなたは、先生になりたくて、一生懸命努力して、先生になりました。その時と、一番変わったのはどこでしょうか。

まず、確認しておきましょう。確かに、変わった方が良いことはたくさんあります。

- ・教師としての仕事に段取りよく取り組めるようになり、能率的に事務処理ができるようになった。
……………おめでとうございます。とてもよかった！
- ・親御さんと、少しは配慮して話ができるようになり、協力して、子どもを育てられるようになった。
……………教師の鏡です。これは、とても大きな前進！！
- ・授業もわかりやすく計画したり、取り組めたりするようになり、子どもたちも勉強を好きになってきた。
……………こんな先生になれば、理想ですね。近づいていますよ。



じゃあ、何が変わって、少し寂しくなったり、あの熱い想いが消えたように感じているのでしょうか。何かあきらめているように感じたり、……そんな感じはしていませんか？



あなたが一番変わったのは、ここではないかと思うのです。

あなたが気にしているのは、子どもたちよりも、周りからどう見られるか、ではありませんか？

日本人の特徴：他人の目を気にして、行動をセーブする。

これが、大人のあなたを萎縮させているのではないのでしょうか？

先生になりたかった頃のあなたは、きっと、自分と、受け持つ子どもたちのことしか、頭になかったでしょう。

でも、先生になってみると、大人社会での仕事なので、

まわりの先生にどう思われているか、

校長さん教頭さんにどう思われているか、

保護者にどう思われているか、

それが、とても気になっていませんか？



日本人は「みんなと同じが良い」という価値観が強いと言われます。同調圧力という言葉も・・・。

となりの家が冷蔵庫を買えば、自分も買いたくなる。となりが車を買えば、自分も車を買いたくなる。

周りと比較して、同じくらいだと満足する。これが高度成長を助けたとも聞きました。

ですから、自分のクラスも、周りのクラスと同じくらい落ち着いていれば安心し、同じくらいの学力であれば安心する。

もし、荒れている様子なら不安になり、子どもたちが立ち歩くと、躍起となって座らせようとする・・・。

例えば

- ・頼りない先生と思われたくない。
- ・学級崩壊しているクラスと言われたくない。
- ・私の受け持っているクラスだけダメなクラスだと言われたくない。
- ・力量不足の先生と思われていないだろうか。

そう思う怖れが、気持ちを暗くしたり、問題が起きても隠したくなったり、・・・。



肩に力が入って、よいけなこと、あまり叱らなくてもいいことを、受け持った子どもたちに強くあたったり、

他のクラスと比べられて、非難されることや、遅れをとっているように思われることを怖れて、

必要以上に、早くと、せき立てたり、しつこく強く強制したりしていないか・・・。

ベテランの教師なら、落ち着かせる技術も身に付けていますが、若い先生なら、そういう技術が身に付いていないので、まわりのクラスに合わせて、何とか落ち着かせようとして、より強権的な方法を取りがちです。

それでも、内心は、うまくいかないことにジレンマを持ち、そんな自分に少し嫌気がさしてしまう・・・。

例を出しましょう。

はじめて学年副主任を担当した年、私は、自分のクラスのメンバーが他の先生たちに迷惑をかけてはいけないと、肩に力が入り、いつも気にしない見栄を張ってしまいました。

修学旅行の時、女の子を、厳しく叱って、明け方まで説教をする羽目に・・・。

彼女は、さんざんな修学旅行として、とても怒っていました。当然だと思います。

私は、その子のことを第一に考えていたのではなく、周りの先生へのメンツを気にしていたと思います。



もっと具体的に書きましょう。

就寝時刻後、部屋を出ようとした彼女に、先生たちでお説教をしました。そこで、終わらせればよかったのに、

彼女が部屋へ戻る時、他の先生に言葉づかいの悪い暴言（よく覚えていないけれど、せんこう、うるせえんだよなんていう意味だったと思います）を言ったものだから、それを撤回させようとして、徹夜させてしまったのです。

彼女は、絶対に謝りませんでした。

今なら、「そんな言葉づかいは良くない」と、やさしく諭して、相手の先生には、私が謝って済ませますが、その時、他の方法がわからなかった私は、もう、いい年になっていたはずなのに、

最後まで、朝まで、粘ってしまいました。

その女の子とは、結果、卒業まで心を通わせるには至らず、相手に壁を作らせてしまったことに、今も胸が痛みます。

ベテランの先生から聞いた言葉が身に沁みます。

「女性の先生は、逃げ道を断って、子どもたちを追いつめてしまうところがあるから、気をつけないといけない。」これは名言。夫婦げんかの時も、私自身が、相手を追及して、追いつめがちになり、妥協をするという学習をするのに何年もかかりました。

女の子のその時の気持ちや状況を聞くよりも、暴言の女の子に謝罪させようとした・・・ことに凝り固まって、周りの先生たちの目を気にした私の行動が、さらに彼女をかたくなにさせました。楽しみにしていた修学旅行を台無しにさせられたと思った彼女は、そのせいで、心を開かなくなりました。



子どもたちの一番身近にいる大人であり、学校では、頼りにしたい存在の担任の先生が、自分の事を守ってくれず、見栄を張っているとしたら、「ばくより、私より、学校が大事なのか！」と反発するでしょう。そういうところを、子どもたちは、実によく見ていると思うのです。

周りに合わせることで、見失ってしまうこと。・・・細かなルールと子どもたち

先生が、どちらを向いているのか、

自分たちを守っている側に立っているのかどうか、それは、子どもたちがよく知っています。

日本の学校文化は、とにかく事故を恐れ、平均化を求め、安全に無難に・・・というものです。これは、全てが、まちがいなわけではありません。

スペインの陸上チームの監督が、こういうことを言っていました。

「日本では、子どもたちが平等に走るタイムを測ってもらえていて、幸せだ。

スペインでは優秀な選手しかタイムを測らない。」

安全に、みんなが平等に、・・・これは、子どもたちにとっても、特に中学生にとっては、学校をドロップアウトする機会を減らすのに、役立っています。日本の若者の犯罪率が低いのも、そうした学校の役割が大きいと思います。

しかし、こうした事故を恐れ、平均化を求め、安全に、無難に・・・という日本の学校文化は、思春期の中学生・高校生にとっては、とてもつらい文化でもあります。

自己評価を上げたい、自信を深めたい、個性を打ち出したい、そういう思春期なのに、学校は、個性を封印し、ルールを守り、平均化を求めます。

おしゃれに疎かった私自身でさえ、高校生の時には、ワイシャツの襟はたてて、少し格好をつけ、スカートの丈は

野暮ったくならないよう、気を使いました。スカートのプリーツを寝押しし、先生たちが気づかない程度の、細かいおしゃれに、全員の女子が、毎日夢中でした。それが、思春期の本来の子どもたちの姿です。しかし、生徒手帳に書いてある校則だけでなく、中学校では、さらに細かい先生たちが決めたルールが、どんどん導入されていくことが多いのです。

若い先生たちが増えている今は、私たちが若かった時と同じ。

若い先生たちほど、若い先生が多い環境ほど、白黒つけたくなるようです。

「あいまいな部分」を残すよりも、教職員全員の共通理解・同一步調という言葉のもとで、「細かく決めた方が指導しやすい、○か×か、白か黒か、決定しよう」という話題が、よく会議で出されます。

(この論理の中には、自分だけが注意して、子どもたちから嫌われるのは不公平だ。みんなが注意すべきだ。という論理もあって、そのニュアンスには、「子どもたちから慕われない」という欲望と嫉妬の、うっすらとした陰が見える気がして、私はとても居心地が、悪くなります。)

たとえば、

- * スカートの丈は、「膝が隠れるくらい」なのか、「膝が完全に隠れる」なのか？
- * くるぶしソックスはダメなのか○なのか？
- * 女子の髪形で、高めのポニーテールはダメなのか、編み込みは OK なのか？
- * 派手な靴はダメと言ったら、黒か白か？それとも白だけか？ 他の色、グレーは良いのか？
- * セーターの派手な色はダメ、は、茶色は良いのか？グレーは？キャメルは？白は？

些末なことのはずですが、先生たちの会議で真剣に何度も、何十分も話し合われることも、よくあります。



昔から今に至るまで、ずっと、中学や高校では、思春期の子どもたちと学校の先生たちとが、校則やルールをめぐる、バトルを繰り返しているのがお決まりでした。ですから、永遠の課題の、このことだけに、エネルギーの大部分を注いでしまうのは、大きな間違いだと思います。

それに、最近、社会的には「多様性を認める」社会が求められています。ところが、学校社会では「多様性」よりも「画一性を求める」方向へと進んでいるように見えます。

今から 30 ~ 40 年前の、制服を廃止して、私服で通う公立高校が多かった時代が、嘘のようです。

子どもたちに画一化を求める学校は、先生たちにも画一化を求めてしまいます。

あなたの教師としての個性すら、必要ないように思えるかもしれません。

そういう学校社会の中では、私たちも、他の先生たちの目がとても気になるのです。

周囲の大人の目を、先生自身が気にする時、権力を持たない子どもたちの声には、耳をふさいでおくのが、一番便利でたやすいことでしょう。

しかし、まわりの目を気にしてばかりいる先生のことを、「こちらを見てくれない」と思う子どもたちが、認めるでしょうか。

同一步調を求められる学校で、試される時は、よくあります。

「朝読書の時、先生のクラス、立ち歩いている子が多くて、うるさかったよ」

「掃除の時、〇〇君が廊下で遊んでいたよ」

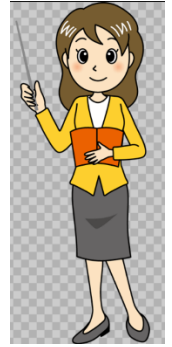
「先生のクラスの〇〇さんは、髪を染めてるんじゃない？」

何気ない毎日のとなりの先生の忠告やアドバイスが、自分の未熟さを指摘するように思えて言われた先生は、若ければ若い先生ほど、指導を懸命にしようとするでしょう。

私自身も、若い頃「二度とルール違反をさせまい」と考えて、本人が絶対しないと約束し、私自身が安心するまで、20 分でも 30 分でも、お説教から解放しませんでした。



しかし、いろいろな先生に指摘を受けて、右往左往してしまう…その間に、どうか、自信を無くさないでください。
指導できないこと、指導しないことを、そんなに相手の先生は気にしていません。
一応、言っておくくらいのつもりです。



若い先生たちのクラスが落ち着かず、問題が発生するのは普通の事です。
最初からうまくやれる先生は、一人もいません。完全をめざす必要はないのです。
それよりも、右往左往して、注意ばかりしていると、子どもたちにとっては
「小言ばかり言う先生」になり、最後には「僕たち、私たちの言うことなど一つも聞いてくれない、
顔を見れば注意ばかりするウザい教師」に成り果ててしまいます。
初心は完全に裏切られてしまいます。

私の娘の学校で起こったことを説明しましょう。

学年に、髪を染めていた男の子がいて、担任の先生と話し合い、前日に少し黒染めして、修学旅行の集合場所の駅に現れました。

ところが、生徒指導担当の教員がチェック担当で(担任の先生は他の駅でした)、頭髮違反として、家に帰ってもらう一度染めてくるように、指導してしまいました。

その男の子は、結局家に帰ったものの、自分では前もって染めていたつもりだったのに、それを認めてもらえなかったことに反発し、気持ちがもう戻らず、修学旅行には参加しませんでした。

そして、卒業アルバムの修学旅行の写真には、彼は載っていません。

硬直化したルール適用は、本人・クラス・担任さえも、傷つけてしまうのです。

アルバムを見るたびに、彼は傷ついたその時の気持ちを思い出すことでしょう。

娘が修学旅行から帰ってきてから、その話を聞いて、何という心無いことをするのかと、腹が立ちました。

本人や家族のお父さんお母さんは、さぞ、さらに強く思ったことでしょう。

いくつも方法は考えられたはずでした。

- ・前もって、教員間、学年の先生全員でよく話し合って何が大事かを確認しておく。
- ・担任の先生や立場を尊重するように、生徒指導担当は考える。
- ・保護者や本人とよく話し合っておく
- ・それでも、意地を張るようだったら、京都についてからまた話をする。
- ・もし家から戻ってこなかったら、担任が迎えに行く、保護者に連絡もする…



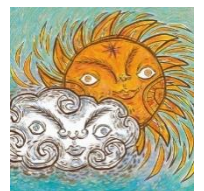
数ページ前に書いたように、ベテランの先生の名言「追いつめるのではなく、逃げ道を作っておく」が、とても大事な事がわかると思います。



生徒指導担当の教員の独断は責められるべきとして、もう一つ、私が考えたのは、担任の先生も、もっと彼を守るべきだったのではないかと…ということでした。

学校の中で、子どもたちの一番の砦になるのが、一番の味方になるのが、担任の役割でもあると思うからです。

子どもたち一人一人の事を、冷静に観察し、把握して、過大評価しないことは必要ですが、それでも、クラスの子どもたち、学年の子どもたちを守ることを一番大事に考えるのは、担当の教員であるべきです。



感覚的な表現ですが、自分から人身御供のように、差し出すようなことをしてはいけない、逆に、周りの攻撃からは守るべきが担任…

それがわかっている生徒指導のベテランの先生たちは、自分たちが怒る役目をして、担任の先生たちになだめる役目をふってくれます。そして、北風と太陽、どちらの役目も分担できるのがいい学年の先生たち集団です。

こういう経験から言っても、だから、闘うべきは、子どもたちではなく、周りの目であり、自分の中の自己規制です。事故を恐れ、平均化を求め、安全に無難に…という学校文化の存在は、いずれ、少しずつ変わっていくでしょう。でも、今、否定できなかつたらどうするか、それは、何が一番大事かを見失わないようにすること。それが、ようやく学校に慣れてきて、社会人として仕事を認められるようになった先生たちが、考えるべきことだと思います。



☆子どもたちの方を向きましょう。

これは、思っているより、とても難しいことだと思います。まず、一人ひとりの個性が全く違う。今まで小学生でも12年間、中学生なら15年間育ってきた環境がある。私たちの想像のつかないような環境で育っている子どもたちが、たくさんいます。人間は、経験の中から考えていく生き物だとも、経験以外は想像できないとも…よく言われます。ですから、私たちも経験していないことはわからない。…そう覚悟してもいいでしょう。一人ひとりの子どもたちが、なぜ、そう考えて、そう行動しているのか、…これは、完全にはつかめないと言ってもいいかもしれません。でも、努力はできますし、する必要があります。

なぜなら、子どもたちは、必ずどの子どもたちも、自分を肯定してもらいたい、愛情を向けてもらいたい、それは、まだ大人にならない生き物として当然な感情なんですね。誰でも、そうやって大きくなっていくのですから。そういう子どもたちが40人も集まっているのがクラスですから、1年間のうちに、必ず教科担任でも、担任でも、「君のことを見ているよ、ちゃんと。」というメッセージを、どの子にも1回ぐらいは、送る必要があるのではないのでしょうか。必要がある子どもには、何回でも、毎日でも…でも嫉妬を呼び覚まさないように。これがむずかしいところです。そういうことが前提になって、いっしょに生活できるのだと思います。

どういふに、子どもたちと向き合うか、これも、思ってるより難しいことですね。

まず、全員を好きになる。



そんなことはできない、そう言う先生もいるかもしれません。でも、そうだとしたら、先生をやめるしかありません。それは覚悟する必要があります。気にいらない子どもがいても、その子には保護者がいて、愛情を持って育てられてきました。その保護者の方から、彼らの成長を期待して預かっているのが、教師です。それで給料をもらっているのですから。感情が先に立って、仕事ができなかつたら、その仕事は合っていないし、プロとは言えないでしょう。でも、努力できるとしたら、大丈夫です。苦手な子どもたちがいても、その子のいいところを、見つけることができたり、他の子どもたちがほめるのを聞いて、ちょっと見直したり、…そういうことができれば大丈夫。

なぜ、好きにならないといけないか？ それは、相手もその感情を、感じてしまうからです。



大人だって、誰に嫌われているか・・・それは、分かるものです。

ならば、子どもたちはなおさら。かわいがってもらいたいと思っている小学生・中学生こそ、みんながみんな、そういう感情に、とてもとても敏感だからです。



好きになるコツはあります。

「もう、しょうがないな」、家族だと、そう思えばいいのです。つまり、あばたもえくぼまでとはいきませんが、日常生活なので、欠点も含めて「家族」なのです。生活する時に嫌いも何もありません。

自分は、年の離れた兄貴、年の離れたお姉ちゃん、そういうつもりではどうでしょう。

妹や弟のダメなところは、兄弟だから、ちゃんと指摘してあげなくちゃいけないけれど、かわいがって面倒をみる・・・そんな感じです。私の場合には、中学生は、私の息子や娘のつもり・・・でしょうか。

そして、もう一つのコツは、他の先生たちから、彼らの得意な面を話してもらうことです。全然見えなかった面を、きっと教えてもらって、見直すことができるでしょう。そのために、先生たちの毎日の子どもたちの話、職員室の雑談、コミュニケーションが大事です。

子どもたちがもう一つ敏感なのは、わざとらしさです。ご機嫌取りやおべんちゃら、迎合・・・それを、最初は子どもたちも喜ぶでしょう。でも、それがいつまでもわからないほど、子どもたちは鈍感ではないし、本当に心からほめてくれているのか、自分たちのことを考えてくれている愛情なのか、それが作りものなら、化けの皮ははがれていきます。ですから、自然に。

子どもたちとコミュニケーションが苦手なら、ただ、黙って、聞いているだけでもいいのです。

子どもたちの話を聞くのが得意な先生たちもいます。若い先生たちには、たくさん話しに来るでしょう。

教卓の周りを囲んで、放課後も、休み時間も、愚痴や楽しかったことやうわさ話や・・・

(ただし、ここで得た情報を利用しようとか、噂を逆に、先生の方が広めてしまうことは、厳禁！！！！)

いろいろな話を聞くことから始めても十分です。忙しそうにしているより、

話を聞ってくれる先生が好き、それが、子どもたちの本音でしょう。



実は、私は何気ないおしゃべりは苦手です。

でも、得意なのは、困ったと言って、ちらっとひとこと言うてくる子を、放課後じっくりと全部聞いてあげること。

今、どの学校でも教育相談週間というのをやっていますので、その時に、そう訴える子たちは、最後の方に回して、一人30分でも聞いてあげる・・・解決すべき問題なのか、ただ聞くだけで気分が収まる問題なのか・・・それを考えながら、十分時間を取ってあげること、「困った時は頼りになる先生」と思ってもらえているようです。

それでも十分ではないでしょうか。

いつも、攻撃的に話を進める男の子にも、「参ったなあ」と思いながら、最後にしてあげて、30分はつきあいました。毎回毎回そうやっていたら、半年たったら、「もういいや、大丈夫」・・・そう言うようになってきました。

ようやく、こちら側も、「常に話を聞いてあげることが可能だよ」、そういうサインが示せたのだと思います。

人の目を気にしない、そのためには自信を持てる教科や分野を作ろう

人の目、周りの先生、保護者、そういった大人の目を気にせずに、子どもたちと楽しい関係を作っていくために大事なことは、私たちの仕事が「子どもを育てる仕事だ」ということです。

子どもたちを賢く育てる、子どもたちの社会性を育てる……そういうことが、教師には求められています。
教科・授業、或いは特別活動・部活……その内容で、子どもたちを引き付け、魅力ある内容を実施できること、そういう自信がみなさんにつけば、自然と人の目を気にし過ぎないですみます。

例えば、自分が受け持っている教科の中で、まずは、一つだけの単元でも、子どもたちの興味を引き、勉強するのを楽しいと言ってもらえるような、そんな授業をすることができれば、子どもたちの感想から励まされたり、生き生きした子どもたちの瞳に、とても力づけられるでしょう。それを、長年かけて、一つずつ増やしていけばいいのです。

私の場合は、まず、どんな荒れている学校でも子どもたちを引き付けられると自信が持てたのは、原始時代の勉強での火起こし体験でした。どんなにヤンキーの男子でも、どんなに体の大きな男子でも、火起こしで炎になるまで面倒を見ると、無条件に言うことを聞くようになってくれました。

「まず最初に、火遊びをしない、人に火を向けない、ダメと言ったらだめ、私の言うことは絶対だよ」と体験上の注意を言っても、火起こしの魅力の前に、どんな男子でも言うがままです。

そして、火がつくと、満面の笑顔、そして、周りに自慢しに行きます。さらに、何度も火を付けたくて仕方ありません。「こういう体験をさせてくれた先生」ということで、感謝までされてしまいます。私自身も、こんなに輝く顔をしてくれるものなのか、なんてかわいい笑顔！図体でかいのに、いいねえ～～と、うれしくなってしまいます。

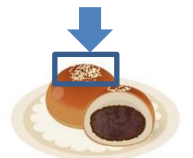


他にも、例えば、10年ほどして自信が持てるようになった、アヘン戦争についての勉強です。
まず、アンパンの上のけし粒を用意して

「アヘンの種」と言って紹介すると「先生、つかまらないの？大丈夫？こんな危ないもの、どうして持ってるの？」いたずらっ子は、私が黙っていると、あっという間に食べてしまうので、私が「あれ～～」とつぶやきます。

そう言うだけで、その子が「気持ちがよくなってきた？」……まわりが「まずいよまずいよ、大丈夫なの？」と大騒ぎ。そして、種明かし。「実は、麻薬のアヘンの原料は、種ではないんです。この種はアンパンの上ののっているやつだよ」そう言うのと、子どもたちはえ～～～～？なあんだあ、とホッとします。

そこで、ようやく、アヘンの麻薬がどうやって作られるか、麻薬を使った人々はどうなっていくか、ルポルタージュの文章を読みあげます。中学生たちは興味津々。シーンとして読みふけています。



これだけでは、単なる薬物に関する授業なので、歴史上の意味を伝えていきます。

アヘンを売りつけられた当時の中国の困難を思い、その後に日本にやってきたイギリスが、開国の要求を突きつけたことを知ると、幕末の日本もアヘンは大丈夫なの？と、当時の日本の困難な状況が中学生にも思い描けます。

子どもたちは知りたいことを知り、ドキドキする驚きがあり、歴史の当時の様子がわかる！と実感すると、授業をする私を、敬意を持って見てくれるようになりました。

こういう得意な単元が作れるようになると、子どもたちがどんなに気分の上下があっても、周りの先生たちとのコミュニケーションがうまくいく前でも、「大丈夫、やがては子どもたちが支持してくれる」と自信が生まれます。

子どもたちを育てるのがプロとしての私たちの仕事なので、楽しく、しかもわかる、或いは、できるようになる、そうした達成感は、子どもたちと私たちの絆を太く強固なものにしてくれることでしょう。

そうやって、一步一步、仕事を終える日まで、前に進むことができます。

私たちの仕事を評価してくれるのは、子どもたちの感想であり、笑顔であり、子どもたちの自信なのです。

うまくいった授業、活動の時の子どもたちの瞳や笑顔や盛り上がる雰囲気を覚えておいてください。
それが、私たち自身の物差しになっていきます。それぞれ皆さんの自分の物差しを作っていきましょう。

☆あきらめずに初心を忘れないようにしましょう。

うまくいなくて、くさってしまったり、もうどうしていいのかわからなくなったり、教師という仕事に自信を無くしてしまう……そんなことがあるかもしれません。

でも、教師という仕事は、とても素晴らしい職業です。

なぜかという、未来に大人になる子どもたちと、いっしょにさまざまなことを体験させてもらえる仕事だからです。

何と言っても、子どもたちに計算や打算はありません。

大人ほどの自分の利害関係に関する目利きは、ほとんど持ち合わせていません。

だから、ぶつかる時は正面からぶつかってきて、こちらが大きく傷つくこともあるでしょう。

でも、そんな時は、彼ら自身も相当傷ついています。

そして、傷ついている私たち教師、そして傷ついている生徒、それぞれを、周りのクラスメートや子どもたちは、心配しています。それが、大人の人間関係と違うところです。

大人同士なら、そっとしておいてあげよう、あまり干渉したくない、あくまで他人のことだから、プライバシーもあるし……。

そんな配慮は、子どもたちには関係ありません。そこが、率直さゆえ、子どもたちから癒され、慰められるところです。



そして、傷ついている先生には、心配している子どもたちだけではなく、心配している仲間の先生たちも必ずいます。なぜか、それは、自分も傷ついたことがある経験者ばかりだからです。



あきらめないでください。

学校の組織、慣習、ルールに失望し、子どもたちとの関係がうまくいなくて、自分の思うようにならなくて……

それは、どの先生も必ず通って来た道です。

学校社会はすぐには変わらないでしょう。でも、それでも、やりがいはあるのです。

恥ずかしいことですが、私の夢の話をすれば、私の夢は日本の学校を変えることでした。

「楽しくわかる勉強、縛られず自由に何でも話し、何でも行動できる学校、笑顔で通える子どもたち」

そういう壮大な夢を抱きました。



20年ぐらいした時、その夢は破れたと思いました。

日本全国は、早々変えられない……それを痛感しました。

でも、辞める気はしませんでした。

なぜか、それは、授業と子どもたちとの関係が楽しく充実して、「生きてる」と感じる位、やりがいがあったからです。

子どもたちが、私に自信を付けてくれたからです。

学生時代には、そんなに人気者になれたことのないのが、私の性格でした。

でも、中学生たちに受け入れられ、あだ名をつけられ、卒業式には走ってきてハグしてくれる子たちが多数。

そんなことは、今までの私では考えられませんでした。(年を取ってきて、人畜無害になったためもあります。年を取るとペット化されて、中学生から「かわいい」とか言われます。戸惑う私を「かわいいうって言われて喜んでいる」と中学生はいじります。年を取るといいことも、おもしろいこともあるんですね。ここは、怒っても損です。)

壮大な夢は変わりました。

「私の受け持った子どもたちだけでも、楽しく、明るく自信をもって、毎日過ごしてもらえれば、それだけでいい。そして、卒業して将来ずっと幸せでいてほしい！！」

そういう意味では、初心は全く忘れずにここまで来れた、そう思っています。

例、私の場合……37年の成果＝小さなツとクラスの子どもたち

38年目になりますが、思った以上に達成感があります。それを与えてくれたのも子どもたちです。

仕事をしてきて、いろんな同僚の人たち、仲間たちとの交流がありました。その人たちと時々会うこともあります。

でも、忘れられないのは子どもたちです。

いろいろな事件、その時のクラスの子どもたちの様子、一人ひとりの行動、言ったこと……

忘れられないのは、心に刻まれているのは、子どもたちのことなのです。

子どもたちと私との関係については、保護者も、周りの先生たちも、入り込むことができません。共通体験ですから。クラスで楽しかった時、盛り上がった時の宝物の思い出は、唯一、いっしょに同じ教室で過ごした、子どもたちと私だけの物なのです。そういうことに、何十年もして気が付きました。思い出話ができるのは、クラスの子と私の間だけ、その話を聞いても、他の誰にも、打てば響くような共感はないのです。

昨年卒業したクラスでの、とても小さくて、とても心暖まる宝物の思い出。

クラスに、ひらがなが不得手で、中学1年生の時には、バカにされると悔しくて、キレ気味に泣いてしまう体の大きな男の子がいました。

ちょっとガンコで、こうと決めたら融通が利かなくて、それでも、自分がんばりたいと、前に出ることを好んでします。帰りの会の司会を一人で立候補し、1年間独占しました。

1年生の時には、時には、「男の子なんだから泣くな！」と私が大きな声で言って、彼がげんこで涙をぬぐうこともよくありました。

ところが、3年生の後半になると、男女混合で毎日ドロケイの鬼ごっこをするため、昼休みに、教室からみんな走り出して行くようになりました。給食を食べながら、鬼と逃げる方とのグループ分けを、自分たちで決めていたのですが、その時に、彼は毎日鬼に立候補していました。笑顔で彼は、完全にクラスの一員でした。



そんなある日、卒業を間近に控えた日、国語の先生から報告。

「彼、小さなツを書けるようになったんですよ」

つまり、促音を、自分で言う音と字をちゃんと対応できるようになった…ということだったのです。

それだけではありません。彼女が教えてくれたのは、「彼が、小さなツを書けるようになったって、班の全員が、すごいでしょ！ってニッコリ笑ってみんなが教えてくれて、その時、彼が黒板に小さなツを書いて、ドヤ顔（どうだ！と決めた顔）を見せつけたんです。思わず笑っちゃって、すごいねってほめました」

私には、その情景が目浮かぶようでした。そして、私には、その話が、子どもたちが私にくれた宝物のように思えました。彼を認めるまわりの温かさ、そして、彼自身が持つようになった自信、それを知ることのできた私の誇り。

私がやってきたこと、ちょっとイカシテルかも？ まちがっていなかったな！と。

そう思わせてくれた、子どもたち全員に感謝する思いでした。

たいてい、卒業する時、或いは何年か後、終わりよければすべてよし…そう思わせてくれるのが先生の仕事です。

みなさんも、ぜひ、楽しんで癒されて、困難を乗り越えていってほしいと思います。

エールを送ります。